論　文

同志社と看護：京都看病婦学校第一回卒業生伊藤てつの看護キャリアから

岡　山　寧　子
同志社女子大学・看護学部・看護学科・特別任用教授

Doshisha and Nursing: Nursing Career of Tetsu Ito, the First Class Graduate of Kyoto Training School for Nurses

OKAYAMA Yasuko
Department of Nursing, Faculty of Nursing,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor

要約

伊藤てつは、キリスト教と共にあった中で、梅花女学校でのリベラルアーツといわれる先進的な教育を受け、高い教養と英語力を身につけた上で、京都看病婦学校での近代的な看護を学び看護婦となった。その後、アメリカでの研修を積み、帰国後さらに先進的で専門的な看護を実践・教育するとともに、執筆活動を通して衛生思想の普及のために活躍し、日本の看護の質の向上に尽力した。看護婦という新しく自立した専門職の道を自ら切り開いた人生であった。

彼女の看護キャリアには幾つかのコーナーストーンがあったと考えられる。その一つは、A. コルビーやF. ガードナーなどアメリカン・ボードの女性宣教師たちとの出会いである。それが梅花女学校での学びにつながり、高い教養や英語力だけでなくキリスト教へのマインドをさらに深めることができた。もう一つは、京都看病婦学校での宣教看護婦 L. リチャーズとの出会いである。てつは L. リチャーズの傍らで看護の講義や演習、実習に至るまで通訳、さらに通訳を介して診療や看護教育が円滑にすすむような役割をも担う中で、すぐれた看護の実践や教育への興味をさらに深めることができた。そしてもう一つ、看病婦学校卒業後、アメリカの病院での研修を経験したことである。帰国後は、さらに先進的で専門的な看護を実践・教育、執筆活動など、使命感をもって日本の看護の質の向上に努めた。

はじめに

1886（明治19）年の秋、同志社病院と京都看病婦学校（以下、看病婦学校）において近代的な医療活動と看護教育が始まった。それは、アメリカの海外伝道団体アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions：以下、アメリカン・ボード）の支援のもと、同志社の創立者新島襄により設立された。新島は、当初、同志社の大学化とともに医学部設立を目指したが、その実現には至らなかった。その流れの中で近代的な医療と看護教育が開始されたのである。アメリカン・ボードの宣教医ジョン・ベリー（John Cutting Berry, 1847-1936：以下、J. ベリー）を病院長、宣教看護婦リンダ・リチャーズ（Melinda Ann Judson Richards, 1841-1930：以下、L. リチャーズ）を看護監督者に迎え、先進的な看護実践や教育がすすめられた。

1888（明治21）年、看護教育を開始して約２年後、初めての卒業生４名を輩出した。同志社において初めて近代看護教育を受けた看護婦の誕生である。同志社病院・京都看病婦学校同窓会機関誌『おとづれ』第１号によると、第一

回卒業生は伊藤てつ、伴すみ、中（大森）たか、安東小松とある[1]。卒業式の様子についての記述もある。『1888（明治21）年６月26日を以て第一回の卒業式を挙げ四名の卒業生を得たり、本校は此卒業式を以て本校の存在を汎く世に知らしめんため特に大阪の陸軍の楽隊を招きて式中始終楽を奏しめ、生憎新島校長不在に付き山本覺馬氏代りて證書を授與し、上下兩區長及衛生課長等の祝詞朗讀あり來賓も甚だ多かりき』とあった[2]。また、この様子を同年６月27日付の『京都日出新聞』にも「京都看病婦學校生徒卒業式」という見出しで詳しく紹介しており、盛大な卒業式だったことがわかる[3]。さらに同年７月14日発行の「女学雑誌」118号[4]にもこの卒業式の様子が報じられており、関西のみならず全国的に広く発信されていたことがうかがわれる。

彼女たちは卒業後、看病婦学校の第一回卒業生としてどのような看護キャリアを歩んだのだろうか。L. リチャーズの回想記には、入学時は５名いた学生が病気で１名が卒業できず４名が卒業したこと、４名のうち２名は卒業後間もなく結婚、他の２名は母校に残り、病院看護婦および学校の通訳兼助手として活躍したと記されている[5]。日本では、当時、まだ看護専門職がほとんど知られていなかった時代であり、卒業生たちはそれぞれどのように看護の道を切り開き、学校で受けた先進的な看護教育をどのように発展させていったのだろうか。

本稿では、４人の卒業生の中で、入学時から L. リチャーズたちの通訳を務め、卒業後もしばらくは母校の通訳兼助手として従事し、その後アメリカに研修に行き、帰国後果敢に日本の看護の向上に努めた伊藤てつ（以下、てつ）の足跡をたどり、彼女の看護キャリアの一端を探ってみたい。

１．研究方法

使用した主な史・資料は、以下の通りである。

１）梅花学園百十年史（梅花学園百十年史編集委員会、1988）.

２）Linda Richards (1911): Reminiscences of Linda Richards, America's First Trained Nurse. Boston (USA): Whitcomb & Barrows.

３）アメリカン・ボード宣教師文書 Correspondences of the American Board（ABCFM）1869-1896（同志社大学人文科学研究所蔵、マイクロフィルム）の中で、L. リチャーズがアメリカン・ボード本部の渉外幹事 N.G. クラークに宛てた書簡（以下、L. リチャーズ書簡）、同じく L. ガードナーの書簡（以下、L. ガードナー書簡）.

４）京都看病婦学校同窓会：同志社病院・京都看病学校同窓会機関誌『おとづれ』、１号（1900）、３号（1912）.

５）基督教新聞（1883-1899、警醒社）、東京毎週新誌（1900-1902、東京毎週新聞社）.

６）女学雑誌（1886-1888、女学雑誌社）.

７）伊藤てつの略歴については、竹中氏ら（2005）による「京都看病婦学校設立当初の通訳伊藤てつについて」（日本看護歴史学会第19回学術集会抄録集）、またてつの著述については、同じく竹中氏ら（2005）による「京都看病婦学校第一回卒業生伊藤てつの著述」（第25回日本看護科学学会学術集会抄録集）を主に参考にした。

なお、伊藤てつの名称については、史・資料により「伊東てつ」「伊藤テツ」「伊東哲」「於てつ」などと表記されているが、本稿では「伊藤てつ」とする。これは、同志社病院・京都看病学校同窓会機関誌『おとづれ』１号の卒業生名簿の名称である。

また、現在の呼称「看護師」について、本報告では歴史的な存在としての「看護婦」「看病婦」を用いた。

２．伊藤てつの人生

てつの略歴については、竹中氏らが詳しく報告している。それに沿って述べる[6]。てつは、1861（文久元）年９月、伊藤甚三郎の長女として大阪に生まれた。18歳で大阪基督教会にて受洗、アメリカン・ボードの女性宣教師アビー・コルビー（Abby Maria Colby, 1847-1917：以下、A. コルビー）のもとで働いた。その後、てつは A. コルビーが教師を務める梅花女学校英学科で学び、1885（明治18）年７月、23歳で卒業、在学中から積極的に伝道活動に従事した。A. コルビーは、マウント・ホリヨーク・カレッジ出身の宣教師で、1879（明治12）年に来日、梅花女学校に赴任、その後37年間、女学校草創期の発展に尽力した人物である[7]。てつがどのような経過で A. コルビーの下で働くことになったのかは明らかではないが、当時宣教師の身の回りの世話をするクリスチャンの日本人女性が雇われることがあり、てつもその一人だったのかもしれない。

1886（明治19）年の秋、てつは京都看病婦学校に第一回生として入学、1888（明治21）年に卒業した。卒業後は母校の通訳兼助手として従事した。翌年11月には、牧師の上代知新（1852-1920、以下：上代）と結婚した。彼は新島襄から洗礼を受け、同志社で学び、岡山、鳥取などの地方

伝道はじめハワイ伝道などの活動や梅花女学校の運営にも関わっている[8]。てつは初婚であったが、上代にとっては再婚であり、先妻との娘の上代淑は、長らく山陽英和女学校の運営に貢献した人物である[9]。1890（明治23）年１月30日発行のつぼ美１開の会員名簿には『上代てつ』とある[10]。また、梅花学園百十年史にも京都看病婦学校卒業後、上代と結婚との記載がある[11]。２人の具体的な生活は不明であるが、1891（明治24）年６月20日発行のつぼ美16開には『在京都　伊東てつ』とあり、この時期同志社病院・看病婦学校に従事していたとも思われる[12]。

その後、てつは渡米、フィラデルフィアのメソジスト病院にて研修を積んだ。渡米の期間などは明らかではないが、その手掛かりとして、1891（明治24）年に当時の看病婦学校の看護監督者であったI.スミス（Ida Victoria Smith, 1856-1922）と共にいる写真があり[13]、その後に出国したと推測される。I.スミスはL.リチャーズの後任を務めたアメリカン・ボードの宣教看護婦で、てつは彼女の通訳も務めた。また、てつは1898（明治31）年にはすでに日本に帰国していたようで、その期間内に渡米していたと思われる。また、上代より洗礼を受け、同志社で学んだ留岡幸助の日記の中に、留岡は1895（明治28）年４月に渡米し、各地を訪ねたが、フィラデルフィアにも立ち寄り、メソジスト病院へてつに面会に行ったとの記述がある[14]ことから、てつは比較的長期間渡米していたと思われる。

てつは、帰国後、1898（明治31）年には上代と離婚していたようであった。そして東京に移り、大阪基督教会から霊南坂教会に転籍する[15]など、新たな道に進んだ。1898（明治31）年12月９日付の基督教新聞には、施療病院赤坂ホスピタル（以下、赤坂病院）内の看護婦養成所にて、てつが従事との記事がみられる[16]。赤坂病院は医師ウィリス・ノートン・ホイットニー（Willis Norton Whitney, 1855-1918）が1886（明治19）年に設立した慈善病院で、1921（明治34）年には閉鎖されたが、後に日本基督教団赤坂教会となっている[17]。

また、てつは病院での勤務の傍ら、基督教関係新聞への健康教育、育児などに関しての執筆活動を行うなど、衛生思想の普及にも尽力した。

1901（明治34）年６月、てつは40歳で森田長太郎と再婚した[18]が、その翌年３月14日に永眠した。1902（明治35）年３月21日付の東京毎週新誌969号には『森田てつ子氏永眠　森田鐵子氏は本姓を伊東と云ひ、大阪梅花學校京都看病婦學校を卒業し後北米ヒラデルヒヤ美以看護婦學校に入り歸して後は赤坂病院の看護婦長となり、また看護婦養成所々長としてまた實地に就て大に盡す所ありしが、二月下旬より病に犯され、三月一四日午前浦島病院に於いて永眠せり』とある[19]。また、同志社病院・京都看病婦学校同窓会機関誌おとづれ第３号の会員の動静の項の中で『伊東てつ姉　東京赤坂森田長太郎氏に嫁がれしが分娩後まもなく病魔の侵す所となり薬石効を奏せず去る三月一四日永眠せらる余輩此訃音に接し何を哀惜の情に堪んや』と彼女の死を報じている[20]。

このように、キリスト教と共にあった41年間の人生で身につけた英語力を活かし、当時開始されて間もない女学校で先進的な教育を受け、続けて近代的な看護教育を受けて看護婦となり、看護実践や看護婦育成への尽力、社会への衛生思想の普及などに努めた。自ら看護婦という新しく自立した専門職の道を切り開いた人生であった。

３．先進的な教育を受け、キリスト教マインドを深めた梅花女学校時代

てつは大阪の梅花女学校を卒業している。梅花女学校は1878（明治11）年に始まった大阪最初の女学校であり、当時、アメリカン・ボードの支援のもとで関西に立て続けに誕生したキリスト教主義の４つの学校（同志社英学校、女學校のちの神戸女学院、同志社女学校、梅花女学校）の中の１つである。創立者は澤山保羅、成瀬仁蔵ほか教会の信徒有志らの協力により設立された。澤山が早世したために、開設当初は経営的に苦慮していたが、女子教育は進められた。この学校の草創期の状況は、梅花学園百十年史[21]などに詳しい。

てつは本科の英学科で学び、1885（明治18）年に卒業した。当時の本科の授業科目は、邦語（文章）、英学（翻訳、文典）、数学（代数）、理学（生物、物理、化学）、史学（文明史）、修身（聖書）、音楽（唱歌）、講談（談話）、体操、地学（地質学）、生学（植物学）、星学（天文学）、理財（宝氏経済学）、家政（家政要史）などであった。実際の授業には日本人教員やアメリカン・ボードの宣教師や宣教師夫人が担当し、日本語や英語で。授業は、当時文部省からの視察の際に、授業レベルの高さが称賛されたようであり[22]、また同志社女学校など、当時のキリスト教主義に基づく女学校の内容とも似ており、リベラルアーツといわれるレベルの高い教育がなされていたことがうかがわれる[23]。梅花学園百十年史には、てつの卒業式の様子の記載がある。それによると、卒業式は讃美歌や祈祷、卒業生たちによる卒業演説、卒業生への演説、澤山からの証書授与、在校生た

ちの合唱などですすめられた。てつも卒業生の１人として卒業演説を行っている。タイトルは『婦女子高等教育』で、英語で行ったとある[24]。てつの語学力はかなり上達していたことがうかがえる。

在学中、てつはキリスト教伝道の活動にも積極的であった。彼女自身はもともとクリスチャンであったが、女学校自体がキリスト教主義であり、毎日の礼拝、聖書が修身の授業に取り入れられ、ほとんどの教員や多くの生徒がクリスチャンであったなど勉学と共に信仰も深めることができる環境であったことが影響していたと思われる。中でも、1885（明治18）年には、梅花女学校生徒伝道会が組織されるが、てつはその発起人の１人となっている[25]。この伝道会は、生徒たちが会員となり主体的にキリスト教を学び、祈りと共に教会を助け、伝道活動などを実践した。併せて、昼休みなどを利用して手袋や靴下、人形などを作成してそれらを売り、貧困の生徒への支援や伝道の資金とするなど、自主自立の力を身につけていったようである[26・27]。また、1886（明治19）年の春、奈良・伊勢への伝道にてつが選ばれて出張した様子が女学雑誌第23号に紹介されている[27]。

この頃には、てつは伝道に参加するとともに、宣教師の通訳としての役割も担っていた[28]。1886年７月28日付の基督教新聞によると、1886（明治19）年春の伊勢伝道に際し、彼女は当時梅花女学校の教員であったアメリカン・ボードの女性宣教師ファニー・ガードナー（Fannie Aderia Gardner, 1894～1930：以下、F. ガードナー）の通訳として同行している。その後も、F. ガードナーと共に聖書会などを開催、手芸などの指導にも取り組んだとある[29]。F. ガードナーは1878（明治13）年に来日、梅花女学校に赴任、教育と伝道に尽力していたが、1887（明治20）年に体調を崩しアメリカに一時帰国している[30]。てつが看病婦学校に入学した頃には、F. ガードナーは京都の L. リチャーズの下で療養していた。

このように、てつは梅花女学校においてキリスト教主義に基づいた、リベラルアーツといわれる先進的な教育を受け、中でも英語で卒業演説を行い、宣教師たちの通訳を担えるぐらいの英語力を身につけていた。そして、学生たちとの交流はもとより、宣教師や学校関係者、キリスト教関係者などとの広い繋がりの中で、卒業後も宣教師と共に伝道活動に力を注いだ。この時、てつは自らの将来像をどのように思い描いていたのだろうか。キリスト教と共にある活動を展開しようという人生設計を模索していたのではないかとも思われる。

４．看護学生兼通訳であった京都看病婦学校時代

てつが梅花女学校を卒業してから約１年後の1886（明治19）年秋、同志社病院・京都看病婦学校の診療や看護教育が始まった。てつは最初の入学生となった。なぜ彼女がこの時期に看護の道を選んだかについては明らかではないが、１つの手掛かりとして、この時期にてつと共に伝道活動をしていた F. ガードナーの動向がある。というのも、てつが入学する頃に、体調を崩していた F. ガードナーが京都の L. リチャーズのもとで療養生活を送り始めたからである。1886（明治19）年の春頃から、F. ガードナーは体調を崩し、その夏、比叡山で休暇を過ごしながら[31]、アメリカに帰国するか、日本で療養するのかを思案していた。L. リチャーズの書簡によると、同じ時期に、J.C. ベリーや L. リチャーズなども比叡山にて休暇を過ごしており、F. ガードナーは J.C. ベリーから京都での療養をするようにというアドバイスを受けて、L. リチャーズと比叡山から京都に来たとある[32]。F. ガードナーの書簡にも J.C. ベリーの助言を受けて京都で療養中であり、L. リチャーズは大変よくしてくれていると記されている[33]。京都での療養から１か月が経った頃、L. リチャーズの書簡には、夏期休暇ですごした比叡山から下りて、看病婦学校となる京都の宣教師館に F. ガードナーと共に落ち着いた。彼女は療養のために来て、L. リチャーズの患者第１号になったとある[34]。また、L. リチャーズの回想記には、F. ガードナーは看護教育に強い関心を持っており、すぐれた助言をくれたとある[35]。彼女は徐々に回復し、同志社女学校での仕事ができるまでになっていたが、結局京都での療養から半年後、アメリカに帰国した。L. リチャーズは F. ガードナーが帰国して寂しいと述べており[36]、彼女を頼りにしていたことがうかがえる。

その時に、てつがどのように関わったのかは明らかではない。しかし、F. ガードナーの療養はてつが看護の道に進むきっかけの１つになったのではないかと推測される。伝道活動を共にしていた間柄であった F. ガードナーを通して、病院・看病婦学校の様子がてつに伝えられていたのではないかと想像できる。また、看病婦学校としても、その開始には優秀で英語の出来る学生を探していたであろうが、まだ学校の存在がほとんど周知されていなかった時期でもあり、実際には学生のリクルートをアメリカン・ボード関係の教会に頼っていたこと[37]から、てつにも教会や梅花女学校などを通してその様子が伝わっていたことと思われる。それらから、てつは F. ガードナーがいる京都の地で、

キリスト教に基づく学校で宣教看護婦による先進的な教育を受け、看護婦になる決意をしたことは十分考えられる。

では、てつはどのような看護学生であったのだろうか。L. リチャーズは回想記の中で、最初の学生の選考は慎重に行ったが、その中には一番よいミッションの学校を優れた成績で卒業した者がいて、英語が非常によく出来たので、L. リチャーズの通訳として働いてもらったと記されており、おそらくてつのことと思われる。実際に L. リチャーズが行った看護の講義や演習は通訳の助けを借りて行ったと記している。また、実習でのエピソードとして、病室の片隅で、てつの通訳を介して L. リチャーズがある患者への思いや病状について学生に説明した場面で、てつの日本語での説明をその患者も聞いており、自分を心配してくれる L. リチャーズの思いを理解し、受け入れ、治療や療養に前向きになったことが記されていた[38]。それは専門的な内容であったと思われるが、てつは患者にも理解できるわかりやすい内容に翻訳していたのではないだろうか。他にも、児童福祉の先駆者であり、同志社にもゆかりのある石井十次（1865-1914）の明治20年10月11日の日記に、石井が当時の同志社病院の女医 S.C. バックレー（Sara Craig Buckely）を訪ね、てつの通訳を介して、孤児院設立の協力を依頼、５円の寄付を得たと記されている[39]。てつは、S.C. バックレーの診療や看護教育の場などでも通訳を務めたことと思われる。S.C. バックレーはミシガン大学医学校出身の女医で、宣教師の夫が同志社英学校で教鞭を取るために1886（明治19）年に来日した。彼女は、病院・学校での診療と看護教育に積極的に携わり、1892（明治25）年に夫婦で帰国している[40]。

てつは、L. リチャーズの傍らで看護の講義や演習、実習に至るまで通訳の役割を担っていた。その上、医療従事者と患者や学生、キリスト教関係者間など、通訳することで、幅広くコミュニケーションをとり、相互理解に努めていたようであった。それは、てつが学生という立場で看護を学ぶ者であると同時に、通訳として診療や看護教育が円滑にすすむような役割をもっていたことがうかがえる。

このように、てつは看護学生であり通訳であったが、おそらく専門的な看護の知識や技術を事前に準備もなく、すぐに通訳することは容易なことではなかったと思われる。そのために、彼女は講義や演習では事前に専門書や講義録などから学び、L. リチャーズに確認しながら準備していたことであろう。L. リチャーズは回想記の中で、看護学生たちについて、彼女たちの素質の中で特筆すべきはその忍耐力、明るく礼儀正しく、勤勉であること、そして決して文句を言わないことある。また、お手本通りに出来るので実習の効果はすぐ現れたと記している[41]。これは、てつを含め学生たちのことを表していることであるが、L. リチャーズの目には、看護という新しい学びに対して、真摯に賢明に向き合っている学生たちの姿が映っていたのではないかと想像できる。

５．先進的な看護婦として短かくも精力的な活躍

てつは、卒業後引き続き母校の通訳兼助手として従事した。翌年には、牧師上代知新と結婚、それからの彼女の動きは明らかではないが、しばらく後に渡米、フィラデルフィアのメソジスト病院にて研修を積んでいる。その病院は、てつの恩師である L. リチャーズが帰国した約１年後の1892（明治25）年の９ヶ月間看護指導者として従事していたところであったが、てつの渡米時に２人に接点があったかどうかは不明である。てつは、帰国後間もなく東京に落ち着き、赤坂病院の看護実践や教育に従事した。1898（明治31）年12月９日付の基督教新聞によると『看護婦の腐敗せることは世既に之を知れり、如何にすれは之を改良し得べきかは實際の問題として重要なり・・今回米國にありて看護婦事業を熱心に研究されし伊藤てつ女史は赤坂病院内に看護婦養成所を設置し斯道改良の一端を圖らるると・・』とあり[42]、彼女は、アメリカでの先進的な看護を目の当たりにして、帰国後日本の看護の遅れを実感し、奮起したようにも思える。具体的な活動内容については不明であるが、1900（明治33）年７月６日付の東京毎週新誌には第二回卒業式を挙行し、３名の卒業生を輩出と記されている[43]。また、てつが亡くなった時、1902（明治35）年３月28日付の東京毎週新誌に掲載された追悼文の中に、彼女の生前の言葉として、『看病の學今や稍々邦人の注意を享に至りたれども、未だ乳臭の息を脱せず・・、これ元より看護者それ自身未だ充分の素養なきにも因るなるべしと雖も、また古來の習慣未だ全く脱せざるが故なり・・』と記されている[44]。日本の看護は今では日本人にも知られるようになったが、まだまだである。それは看護婦自身にまだ力がないことと古い習慣から脱していないからだと憂い、日本の看護はまだ発展途上であり何とか前進させたいと思ったのであろう。そのおもいで新しい看護の実践や教育に精力的に活躍したと推測される。

また、てつは病院での勤務の傍ら、基督教関係新聞への健康教育、育児などに関しての執筆活動を積極的に行って

いる。竹中らは、てつが少なくとも５編を執筆したと述べている[45]。すなわち、1889（明治32）年１月20日・同月27日付基督教新聞805・806号に「呼吸法の衛生法」[46]、1900（明治33）年４月６日・同月20日付東京毎週新誌867・869号には「病家見舞の心得」[47]、1900（明治33）年９月28日付東京毎週新誌924号には「気候の変わり目に際して注意すべきことゞも」[48]、1901（明治34）年５月10日付東京毎週新誌924号「良き小児に育つることに就いて」[49]、1902（明治35）年５月31日付東京毎週新誌926号には小冊子「病家訪問者之心得」（香柏社）[50]が出版準備中との広告がある。前者の４編は、いずれも「家庭欄」に掲載されていた。「呼吸の衛生法」は医学雑誌から抜粋した訳文で、呼吸器の解剖や生理を述べ、肺結核の予防と養生法について２回にわたり執筆している。「病家見舞の心得」は、特に女性に向けて、病人の見舞いに行くときの心がけについて、てつの談話として細かく述べている。「気候の変わり目に際して注意すべきことゞも」も、てつの談話として、家庭で注意すべき事項について衣服、食物、住居について具体的に述べている。「良き小児に育つることに就いて」は、子育ては母親と共に父親の役割も大きく、愛ある父と良い母の存在の重要性を強調した記述となっている。５編目の「病家見舞の心得」は、香柏社から出版された23頁ほどの小冊子で、病家の訪問する者の心得を詳細に述べており、東京毎週新誌867・869号の内容を基本に再度執筆したものと思われる。いずれも、当時の日本の衛生思想としては新しく高いレベルであり、アメリカ留学で培った内容であろう。さらに、教会関係者などへの健康講話なども行っていたようである[51]。

このように、アメリカからの帰国後、東京において、母校で培ってきた看護の知識や技術に加え、アメリカでの研修で学んださらに先進的で専門的な看護を実践・教育するとともに、執筆活動を通して、一般の人々向けに身近でわかりやすい衛生思想の普及に精力的に活躍し、日本の看護の質の向上に努めていたことがうかがわれた。残念なことに、これらの活動を開始して間もない1902（明治35）年に永眠した。

６．キリスト教と共にあった看護キャリア

てつの41年間の人生をみてきたが、キリスト教と共にあった人生で身につけた英語力を活かし、当時開始されて間もない女学校で先進的な教育を受け、続けて近代的な看護教育を受けて看護婦となり、看護実践や看護婦育成への尽力、社会への衛生思想の普及などに努めた。自ら看護婦という新しく自立した専門職の道を切り開いた人生であった。

彼女の看護の道への追い風となったのは、やはりキリスト教に導かれた人生だったからではないかと思われる。その中で幾つかのコーナーストーンがあった。その一つは、A. コルビーやF. ガードナーなどアメリカン・ボードの女性宣教師たちとの出会いである。彼女たちとのつながりを通して、てつは梅花女学校で学んだ。そこで、キリスト教主義に基づいたリベラルアーツといわれる先進的な教育を受け、高い教養や英語力を身につけるとともにキリスト教へのマインドをさらに深めた。そして、てつが女学校を卒業して伝道活動をしながら人生のステップを模索し始めていた時に、F. ガードナーのL. リチャーズのもとでの療養などがきっかけとなり、てつは京都に導かれ、看護の道にすすんだのではないかと思われる。

もう一つは、近代看護のパイオニアであった宣教看護婦L. リチャーズとのつながりである。てつは培ってきた英語力を生かし、L. リチャーズの傍らで看護の講義や演習、実習に至るまでの通訳だけでなく、医療従事者と患者や学生、キリスト教関係者間など、通訳を介して診療や看護教育が円滑にすすむような役割をも担っていた。てつはL. リチャーズたちからアメリカでの先進的な医療・看護の実情をも聞いていたことであろう。それが次のアメリカでの研修につながったのかもしれない。

さらにもう一つ、看病婦学校卒業後、彼女は結婚など人生の大きな転機を経験する。彼女のその頃の詳細はわからないが、一つの方向としてアメリカでの研修を選択したことが転機となったことである。おそらく、アメリカでの医療・看護の実情を知りたい、もっと先進的な看護を身につけたいというおもいでの選択であったのだろう。帰国後、東京に活動の場を移し、母校で培った看護の知識や技術に加え、アメリカでの研修で学んださらに先進的で専門的な看護を実践・教育するとともに、執筆活動を通して、一般の人々向けに身近でわかりやすい衛生思想の普及に精力的に活躍し、日本の看護の質の向上に努めていていたことがうかがわれた。それらの活動・発信の場はいずれもキリスト教関係の病院や機関誌であり、その背景には教会関係者などの確かな支えがあったのではないかと考えられる。

1902（明治35）年３月28日付の東京毎週新誌に掲載された追悼文の中に、てつについて『君は、時に人に誤解せらるるものなきにあらざりしも、これ君が資性嚴峻なるの然しむるところなるがまた以て君が主義の人なりしを證するにたる。』とある[52]。これはてつの気性を表す唯一の言葉で

ある。この言葉からすると彼女は厳しい一面をもっていたようである。いつも自分自身にも厳しく人生を歩んでいたようにも思える。

おわりに

てつは、キリスト教といつも共にあり、梅花女学校でのリベラルアーツといわれる先進的な教育を受け、高い教養と英語力を身につけた上で、京都看病婦学校で近代的な看護を学び看護婦となった。そして、看護実践や看護婦育成や衛生思想の普及などに尽力し、新しく自立した専門職の道を切り開いた人生であった。

最後に、私事になるが、京都看病婦学校第一回卒業生伊藤てつについて探り始めたのは、もう20年以上前のことである。はじめは史・資料もほとんどなくあまり進まなかったが、ともに探っていた竹中京子氏と依田和美氏の地道な努力により、少しずつ史・資料が集まった。それによって点が線となるように、彼女の人生がみえ始めてきたのである。その後、両氏は引退し、私がそれを引き継いだ。しばらくは手をつけずにいたが、同志社女子大学看護学部が開設され、初めての卒業生がそれぞれの道を歩みだしたとき、私の中に、約140年前に自ら看護婦という専門職の道を切り開いたてつの人生がよみがえり、本稿にまとめるに至った。１人の卒業生の姿としてのてつについて、これからも学生たちに語り伝えていきたいと思う。

この稿をまとめるにあたり、かつてともにてつの人生を探り、ご教示くださった竹中氏と依田氏に心から感謝申し上げたい。

文献

1　京都看病婦学校同窓会（1900）：卒業生名簿．同志社病院・京都看病学校同窓会機関誌『おとづれ』第１号：68-69.

2　１と同じ：25.

3　「京都看病婦學校生徒卒業式」『京都日出新聞』：1888（明治21）年６月27日．

4　『女学雑誌』第118号．197：1888（明治21）年７月14日．

5　Linda Richards (1911): Reminiscences of Linda Richards, America's First Trained Nurse: 69. Boston (USA): Whitcomb & Barrows.
なお、この書は、尾田葉子により翻訳され、「リチャーズの回想記［1-10］」として、雑誌看護の科学に1977-1978年に連載されている。

6　竹中京子、依田和美ら（2005）：京都看病婦学校設立当初の通訳伊藤てつについて．日本看護歴史学会第19回学術集会講演集：54-57（相模原市）．

7　安田行秀（2018）：梅花学園140年のあゆみ～学園の歴史の基礎を創った５人のエレガントな人々～．梅花女子大学チャペル・ニュース第14号：8-9.

8　中村光男（2000）：須賀川時代の上代知新．上代淑研究第５巻：25-31.

9　齋藤育子（1988）：山陽高等女学校の上代淑（Ⅰ）．山梨英和短期大学紀要21巻：55-69.

10　「会員名簿」『つぼ美』第１開、１：1890（明治23）年１月30日．

11　梅花学園百十年史編集委員会（1988）：梅花学園百十年史．452.

12　「同盟効卒業生姓名」『つぼ美』第16開、２：1891（明治24）年６月20日．

13　高橋政子（1984）：写真で見る日本近代看護の歴史～先駆者を訪ねて～．18.

14　留岡幸助日記編集委員会(1979)：留岡幸助日記第１巻．466.

15　「伊東鐵子君を追悼す」『東京毎週新誌』970号17：1902（明治35）年３月28日．

16　「赤坂病院看護婦學校」『基督教新聞』799号６：1898（明治31）年12月9日．

17　日本基督教団赤坂教会：Wikiward 2022/08/24閲覧．https://www.wikiwand.com/ja/ 日本基督教団赤坂教会

18　「箇人消息」『東京毎週新誌』932号16：1901（明治34）年７月５日．

19　「森田てつ子氏永眠」『東京毎週新誌』969号21：1902（明治35）年３月21日．

20　京都看病婦学校同窓会（1902）：會員の動静．同志社病院・京都看病学校同窓会機関誌『おとづれ』第３号：21.

21　11と同じ．3-84.

22　11と同じ．65.

23　同志社女子大学125年編集委員会（2000）：同志社女子大学125年．53.

24　11と同じ．66.

25　「梅花女學校傳道會略史」『つぼ美』第３開、39-40：1890（明治23）年３月20日．

26　11と同じ．67.

27 「女生徒の手内職」『女学雑誌』第23号．180-181：1886（明治19）年５月15日．
28 27と同じ．180.
29 『基督教新聞』157号．３：1886（明治19）年７月28日．
30 堀田暁生、西口忠共編（1995）：大阪居留地の研究．大阪在住外国人名簿（居留地時代1868-1899）．24.
31 伊東豊（2010）：「アメリカン・ボード日本ミッション関連資料」（仮題）の概要について．山形大学紀要第17巻第１号．35.
32 アメリカン・ボード宣教師文書 Correspondences of the American Board（ABCFM）1869-1896（同志社大学人文科学研究所蔵、マイクロフィルム）：L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886．９．27.
33 32と同じ．F. ガードナー書簡：LG to NGC, 1886．９．27.
34 32と同じ．L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886．10．28.
35 ５と同じ．70.
36 32と同じ．L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1887．２．17.
37 岡山寧子、竹中京子ら（2008）：同窓会誌『おとづれ』からみた京都看病婦学校卒業生の活動（その４）～出身地に焦点を当てて～．第28回日本看護科学学会学術集会講演集．356（博多市）.
38 ５と同じ．72.
39 石井記念友愛社（1956）：石井十次日誌　明治20年．150.
40 藤本大士（2018）：1880-1890年代の日本におけるアメリカ女性医療宣教師の活動．日本医史学雑誌第64巻第３号．223-239.
41 ５と同じ．71.
42 16と同じ．６．
43 『東京毎週新誌』880号．19：1900（明治33）年７月６日．
44 15と同じ．17.
45 竹中京子、依田和美ら（2005）：京都看病婦学校第一回卒業生伊藤てつの著述．第25回日本看護科学学会学術集会抄録集．193．2005.
46 「家庭　呼吸の衛生法」『基督教新聞』805号．４・806号．３－４：1899（明治32）年１月20日・同月27日．
47 「家庭　病家見舞の心得」『東京毎週新誌』867号７－８・869号７－９：1900（明治33）年４月６日・同月20日．
48 「家庭　気候の変わり目に際して注意すべきことゞも」『東京毎週新誌』892号８－９：1900（明治33）年９月28日．
49 「家庭　良き小児に育つることに就いて」『東京毎週新誌』924号７－９：1901（明治34）年５月10日．
50 『東京毎週新誌』926号20：1901（明治34）年５月31日．
51 「母の會」『基督教新聞』799号．６：1898（明治31）年12月９日．
52 15と同じ．17.